

カルチュラル・スタディーズ領域と方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 佐恵子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005647

Title	カルチュラル・スタディーズ領域と方法
Author	石田, 佐恵子
Citation	人文研究. 44 巻 10 号, p.771-791.
Issue Date	1992
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部紀要
第44巻 第10分冊 1992年 41頁～62頁

カルチュラル・スタディズの 領域と方法

石 田 佐 恵 子

はじめに

日本において「マス・コミュニケーション研究」が社会学の領域としてひとつの地位を占めるようになったのは、1950年代にアメリカからの紹介・導入を経て以降のことであるとされている（竹内 [1987]）⁽¹⁾。その後、アメリカにおけるマス・コミュニケーション研究の強い影響を受けながら、日本のマス・コミュニケーションを対象とする数々の研究が展開された。そのため、一般的に「マス・コミュニケーション研究」としてイメージされるのはアメリカ流の経験主義・実証主義的な研究である。特に社会心理学手法を用いた「受け手」研究はオーソドックスで主流なものと見なされている。

ヨーロッパ諸国においても、1920年代から1950年代まではメディア研究とはまさしくアメリカの経験主義的なメディア研究を意味していた（イングリス [1990=1992:78]）。1960年代からイギリスを中心にカルチュラル・スタディズ（Cultural Studies）と呼ばれる新たな流れが生じた⁽²⁾。この立場は、従来のマス・コミュニケーション研究、メディア研究とは異なったメディア観、コミュニケーション観を持っていることで区別されている。その違いとは、メディア研究における〈事実〉〈出来事〉といったものに対する考え方の違いに端的に現れるようなものである。

1980年代に入って、カルチュラル・スタディズは新たな展開を見せている。特に、大衆文化、ポピュラー文化と呼ばれる諸領域を研究対象とする分野ではカルチュラル・スタディズの考え方に多大な影響を受け、従来の研究とは異なる視点から多くの研究がなされた。その意味で、80年代は「ポピュラー文化研究のルネッサンス」と呼ばれる（Denning [1991]）。カルチュラル・スタディズの視点は、イギリス国内だけではなくアメリカのメディア研究者、

社会学のインタラクショニストたちにも受け入れられ、数々の研究や議論を引き起こしている (McCall & Becker [1990]、Denzin [1992] などを参照)。また、日本においてもカルチュラル・スタディズの考え方が紹介され、評価されつつある (藤田 [1986、1988]、児島 [1988]、伊藤・藤田 [1990] などを参照⁽³⁾)。

カルチュラル・スタディズの問題関心の背景にあるのは多種多様なものであるが、根底には、現代生活のさまざまな局面での変容が考えられているように思われる。カルチュラル・スタディズは、現代社会に生きる人々なら誰もが直接経験しているようななものか、その変容のありかたについて語るための新たな概念、及び、方法を提出しようとする試みである。

たとえば、N・K・デンジン⁽⁴⁾は、現代生活を「映画生成」という表現で特徴づけている (Denzin [1991])。現代生活の映画生成には、次の三つの含意がある。まず、現代生活においてはリアリティとは上演されるものであり、社会的に生産されるものであるということ。第二に、〈リアル〉なものは上演された文化的生産物 (映画やビデオ、TVドラマ) に照らして判断されるということ。第三に、社会学の理論的なリアリティのなかで、相互行為理論、特に〈ドラマ〉として社会をとらえる見方が一般化してきていること。現代生活の映画生成の特質は、〈リアル〉なものと〈フィクシャス〉なもの、〈現実〉と〈イメージ〉を区別する境界線の変容を中心に論じられる。

また、M・R・リアルは、現代の日常生活全般に影響を及ぼしているものの総称を「スーパー・メディア」と呼んでいる (Real [1989])。このスーパー・メディアなしには、私たちは一日たりとも「現代的な日常生活」を営むことはできない。それは、私たちの意識やアイデンティティのあり方、個人的な価値やライフスタイルといったものに影響を及ぼす。スーパー・メディアのつくりあげる現代生活のコミュニケーションは、それ以前の伝統的な生活におけるコミュニケーションとはさまざまな要素が異なっている。リアルはスーパー・メディアという用語を用いて、現代生活の変容について語ろうとする。

デンジンやリアルの問いかけは、「私たちにとってきわめて身近な、そして私たち自身が作り上げている現代社会の文化とはどのようなものなのか？」という点にある。そしてまた、「その文化の意味はどのように生成され続けるのだろうか？」という点でも共通のものである。

本論の課題は、現在でも議論が広く展開しているカルチュラル・スタディズのさまざまな考え方を整理し、その領域と方法を暫定的に明らかにすることにある。まず、カルチュラル・スタディズの特徴的なメディア観、コミュニケーション観、理論背景について概括し、その対象領域について整理をおこなう（1節）。次に、カルチュラル・スタディズにおける分析の方法を概略する（2節）。さらに、カルチュラル・スタディズの視点から分析を実践するための方向づけを試みる（3節）。こうした作業は、カルチュラル・スタディズの立場から現代のメディア⁽⁴⁾文化を分析する準備のためにおこなわれるものである。

1. カルチュラル・スタディズの領域

先にカルチュラル・スタディズとは、ある特徴的なメディア観、コミュニケーション観をもって区別されるものであると述べた。それでは、そのメディア観、コミュニケーション観とはどのようなものなのだろうか。また、カルチュラル・スタディズの研究領域とはどのようなものなのか。まずここでは、いく人かの理論家についてカルチュラル・スタディズの定義を見ておくことにしよう。

バーミンガム大学現代文化研究所（CCCSと略記される）の所長であったS・ホールによれば、カルチュラル・スタディズの研究対象となる「文化」とは「特定の歴史的時代における特定の社会、階級、集団を特徴づけるような生きられた実践（lived practices）」のことである（Hall [1982]、Billington [1991] 参照）。その定義には「社会、階級、集団にその存在状況を経験させ、決定させ、解釈させ、意味づけさせるような実践的イデオロギー」という含意もある。CCCSの文化観に影響を及ぼした主要な流れは、戦後の労働者階級文化についての議論、アメリカ経験主義社会学への批判、構造主義（ポスト構造主義）からの影響、イデオロギー概念の重視、フェミニズムの影響、記号論の受容の6つにまとめられている。また、労働者階級の文化や若者のサブ・カルチャー、メディア、言語、教育・家族・地位の社会的関係を対象領域とした批判的研究であるとされている（Hall, et al. [1980]）。

その後、アメリカに展開したカルチュラル・スタディズは、ウェーバー、シュッツの流れを受け継ぐ解釈的アプローチやインタラクショニズムに影響を与えている。イギリスのカルチュラル・スタディズとアメリカのカルチュ

ラル・スタディズの相違については、前者がイデオロギー概念を重視する批判的観点を明確なものとしているに対して、後者はそうした観点が薄まっているという見方もある。カルチュラル・スタディズの定義は多様であり、現在でもさらに議論が続けられている。

アメリカ流のカルチュラル・スタディズについての定義では、一例としてM・M・マッコールとH・S・ベッカーによるものがある。彼らによると、カルチュラル・スタディズとは「シンボリック・インタラクショニズムが伝統的に関心を抱いてきた意味の社会的構成やその他の論点を研究するために、最近の哲学的、文学的、歴史的アプローチを使うようになった古典的な人間学」のことである(McCall & Becker [1990:4])。N・K・デンジンは、マッコールらよりもさらに意味生成の主體的側面、解釈学的な側面を重視している。彼によれば、カルチュラル・スタディズとは「ある社会の文化を形成する諸制度と、それによる意味の生成とを主題として扱う研究分野であり、解釈的研究は、こうした文化を形成する諸制度によって具体化された問題的経験を考察する」と定義されている(Denzin [1989=1992])。

カルチュラル・スタディズの定義をめぐるそれぞれの立場の差異についてここでは立ち入らないが、共通の点を見いだすとすれば、それは対象領域についての考え方に求められるだろう。すなわち、カルチュラル・スタディズが「文化」として分析の対象とするのは、マス・コミュニケーション、マス・メディアが作り出す文化をも含み込んだ、人々の現代社会の文化全体である。そうした観点からは、従来の、マス(大衆)・カルチャーをハイ・カルチャーに対立させ、マス・コミュニケーションを社会的な文脈から独立させて研究対象として取り扱う見方は否定される。そして、文化の生成、意味の生成をめぐる権力空間、制度的な側面が強調される。

カルチュラル・スタディズの対象領域を明確なものとするために、その特徴となる「文化」観、メディア及びコミュニケーション観、〈現実〉のとらえ方の順に概括しておこう。

1. 1 カルチュラル・スタディズにおける「文化」観

既に見たように、当初のCCCSによる「文化」の定義では「労働者階級の文化」「若者のサブカルチャー」といったいわゆる「ハイ・カルチャー」に対立する「人々の(民衆の)文化」「大衆文化」といったニュアンスが強調されていた。しかし、日本やアメリカのように高度に発達したマス・メデ

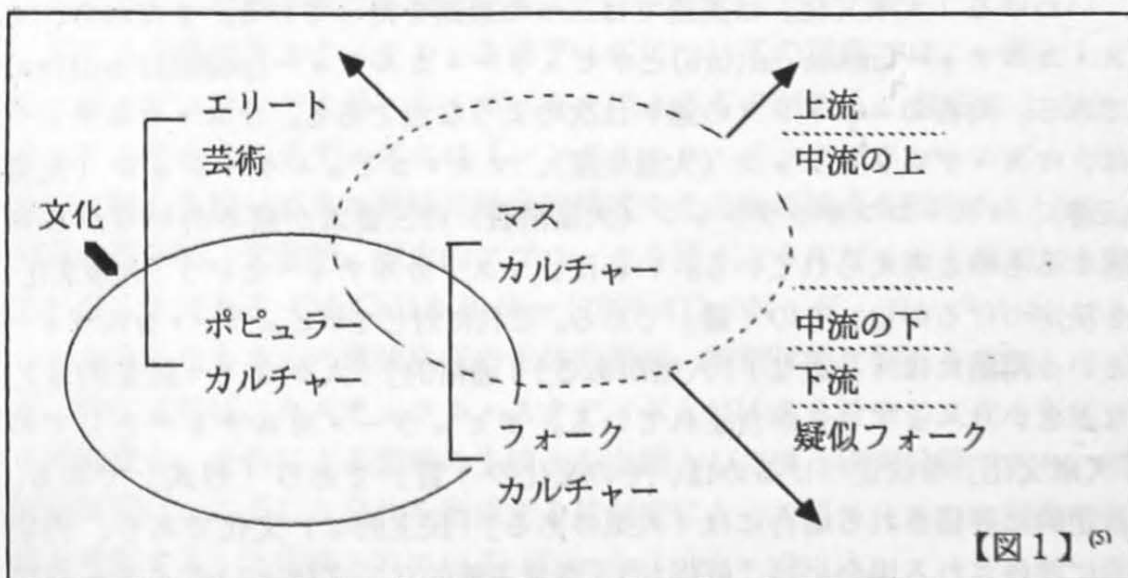
アの作り出す今日の文化においては「ハイ・カルチャー」VS「人々の（民衆の）文化」というコントラストはますます曖昧になりつつあることが指摘されている（Denning [1991] 参照）。

いわゆる「大衆文化」は英語では二つの原語を持っている。すなわち、マス・カルチャー（mass culture）とポピュラー・カルチャー（popular culture）である。両者のニュアンスの違いは次のような点である。マス・カルチャーは、マス・プロダクション（大量生産）、マス・コミュニケーション（大量伝達）、マス・コンサンプション（大量消費）の三要素が絡み合いながら発展するものと考えられている。いわば、マス・カルチャーという「大衆文化」を決定づけるのは、その「量」である。これに対してポピュラー・カルチャーという用語には「身近な」「人気がある」「通俗的」「人々の（＝民主的な）」などというニュアンスが含まれている。ポピュラー・カルチャーとしての「大衆文化」を決定づけるのは、その文化の「質」であり「形式」である。肯定的に評価される場合には「人気のある」「民主的な」文化であり、否定的に評価される場合には「低俗な」「商業主義的な」文化というイメージで語られる（清水 [1992] 参照）。

M・R・リアルは、自らをカルチュラル・スタディズの中のひとつの立場にすぎないとしながらも、文化についての区分を次のように整理している（Real [1989]）。まず、文化の質や形式という観点に立てば、文化はエリート芸術（アート）とポピュラー・カルチャー（通俗文化）とに区分される。流通する量、地域的な観点からすると、マス・カルチャー（大量文化）とフォーク・カルチャー（土俗的・地域的文化）に区分される。さらに、文化の担い手を階級性の観点から区分すると上流／中流の上／中流の下／下流／疑似フォーク文化の5つの区分される（図1）。

重要なことは、マス・カルチャーの成立要素のひとつであったマス・コミュニケーションという形態が、いまやあらゆる文化の領域に見られるようになったことである。つまり、上記のあらゆる区分の「文化」はそれぞれの消費者向けに特徴づけられデフォルメされて、メディアによって語られる文化となったのである。カルチュラル・スタディズの立場では、従来のハイ・カルチャーやパーソナル・コミュニケーションに対立するものとしての「大衆文化」観は否定される。カルチュラル・スタディズは従来「大衆文化」と呼ばれてきた文化現象を分析対象とする。しかし、マス・カルチャーという区分はあまりにも拡大してしまったために有効性を失い（Denning [1991]）、かわって

ポピュラー・カルチャーという視点が研究の中心的な位置を占める。この場合のポピュラー・カルチャーとは、私たちの生活の全領域に広がった「身近な文化」という含意になる。



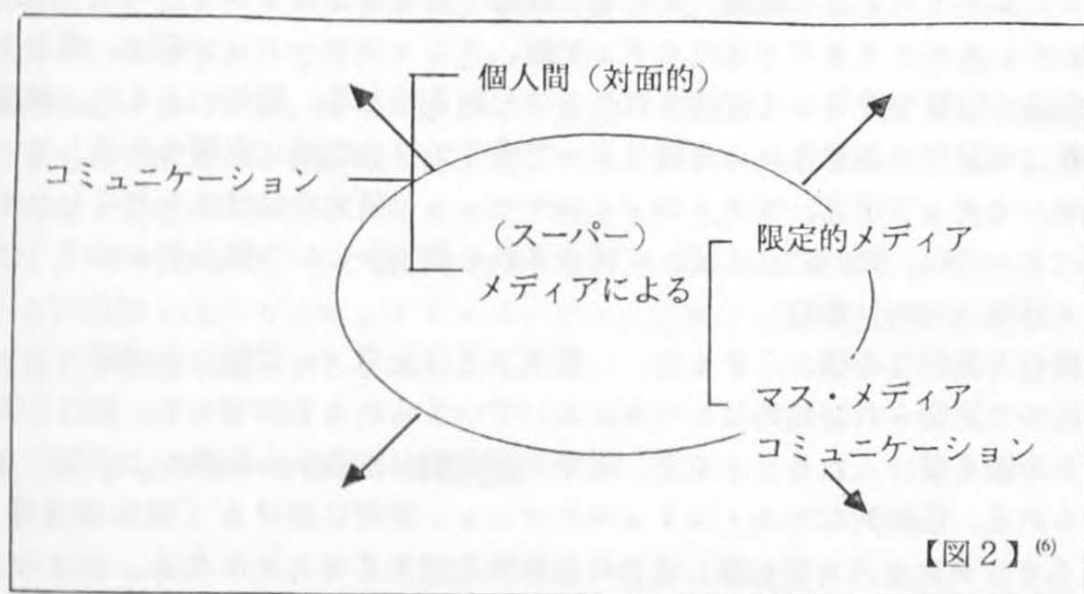
【図1】⁵⁾

N・K・デンジン⁵⁾は、C・ギアーツ⁶⁾にならって文化を「われわれが自分自身をめぐり自分自身に語る物語」とであると定義している。その意味で、個人的なトラブルをめぐって語られる個人の物語を対象とした研究も、ハリウッド映画に描かれる個人的な幸福の物語を対象とした研究も、文化の創造そのものの研究にはかならない (Denzin [1989, 1990] などを参照)。どちらも私たちにとって身近な文化 (=ポピュラー・カルチャー) であり、どちらも社会的に制度化されたメディアによって語られるものである。

1. 2 カルチュラル・スタディズのメディア観、コミュニケーション観

メディアによるコミュニケーションとして従来イメージされてきたのは、すなわちマス・メディアによるコミュニケーションであった。現在では、パーソナル・メディアの普及によって、パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションの境界はますます曖昧なものとなり、どちらもメディアによるコミュニケーションの一部となっている (図2)。1. 1において見たように、今日ではあらゆる区分の「文化」がそれぞれ特徴づけられ単純なイメージにまとめられてメディアの経路にのせられている。こうして、私たちの日常生活のあらゆる領域、私たち自身のつくりあげている「文化」は、

メディアによるコミュニケーションとその影響でおおわれるようになる。



M・R・リアルは、こうした現代の日常生活全般に及ぶメディアを「スーパー・メディア」と呼んだ (Real [1989])。私たちの「現代的な日常生活」は、個人間のコミュニケーションであれマス・コミュニケーションによるものであれ、電話やFAX、テレビや新聞といったごく日常的なメディアなしには成り立たない。スーパー・メディアは、私たちの意識やアイデンティティのあり方、個人的な価値やライフスタイルといったものに根底的な影響を及ぼすものだという。

このように、カルチュラル・スタディズにおけるメディア観は、日常生活全般、文化全体にまで拡大して適用されるものである。その意味でカルチュラル・スタディズにおけるメディア観、コミュニケーション観は、従来のマス・コミュニケーション研究、大衆文化研究の領域から境界を取り払い接合するような視点をもつものである。こうした視点からすると、M・マクルーハンの有名な「メディアはメッセージである」という命題はますます重要な意味を持つ。メディアによるコミュニケーションが現代の日常生活全般に変容をもたらしている。したがって、メディアのメッセージ、メディアのコトバ (言説、形式) の分析は、カルチュラル・スタディズの主要な対象領域のひとつとなる。

1.3 カルチュラル・スタディズにおける〈構成される現実〉観

カルチュラル・スタディーズは、構造主義によるインパクトを受容して以降のコミュニケーション理論、メディア理論であるとされている。なぜなら、カルチュラル・スタディーズのメディア観、コミュニケーション観は、構造主義理論の影響を受容して展開されたものだからである。周知のように、構造主義は《記号の恣意性》の命題によって多くの社会理論に影響を及ぼしているが、メディア研究、マス・コミュニケーション研究の領域にもたらしたインパクトとは、端的に言えば、〈構成される現実〉という観点であろう（伊藤・藤田 [1990] 参照）。

構造主義的な命題からすると、〈現実〉とは記号（＝言語）の分節によって始めて区切られ認知的なレベルにおいてつくられるものである。仮にこうした命題を受け入れるとすると、従来の現実観は根底から転換をよぎなくさせられる。伝統的なマス・コミュニケーション研究における「疑似環境論」や「オリジナル／コピー論」はその有効性を喪失することになる。つまり、〈構成される現実〉という観点からすると、実際に見たことが「現実」でありメディアによる環境は「疑似現実」であるとか、メディアによる情報世界は現実に関係した出来事（＝オリジナル）のコピーである、といった二元論は成り立たなくなる。「実際に起こった出来事」も「フィクション」もそれぞれそういったラベルが貼られているだけで、どちらも記号の意味生成の働きによって作りあげられたものという意味では同じであると言わざるを得ない。

このような〈構成される現実〉観が及ぼした影響は、社会理論やマス・コミュニケーション理論のレベルにとどまらず、日常生活者のリアリティもまたそれと近似のものとして語られるようになる。はじめにで一例として引用したデンジンの「現代生活の映画生成」という表現からもわかるように、現代生活における「確固たる現実」のリアリティの喪失が語られる。メディア（記号、言語）による意味生成が〈現実〉を作り出す。しかし同時に、その〈現実世界〉のリアリティの境界線が、一公の世界／私的な世界、〈実際に起こった〉出来事／フィクションの物語、〈生の〉事実／加工されたイベント、などなど一、すなわち、人々に意味のある感情的経験をもたらす、そのリアリティを境界づける記号のシステムそのものが、錯綜するイメージに覆われ霞んでいる。

カルチュラル・スタディーズは〈構成される現実〉という観点からあらゆる文化的現象を分析の対象とする。従来のマス・コミュニケーション研究や大

衆文化論の枠内にとどまることなく「私たちにとって身近な一したがっていわゆるポピュラー・カルチャーがその対象の中心的存在にはなるのだが—文化とはいかなるものなのか？」という問いに答えることをその課題とする。現代生活においては、その対象となる文化の大半はメディアによって構成されるものであることは既にみたとおりである。カルチュラル・スタディズの課題は「文化は（メディアによって）構成される」ということを示すだけでなく、「それがどのように構成されるのか」を明らかにすることをも含んでいる。次節では、カルチュラル・スタディズにおける分析方法に焦点をあてて若干の整理を試みることにしよう。

2. カルチュラル・スタディズの方法

カルチュラル・スタディズとはメディアによって構成される現代の文化の諸領域を対象に、それがどのように構成されどのように意味生成をつづけるのかという課題に対して、新たな概念と方法を提出する試みである。これまでに蓄積された研究は、文芸批評を始め、テレビ放送、映画、ポピュラー音楽、MTV（ミュージック・テレビジョン）、写真など、多様な領域に及んでいる。その方法論をまとめることは容易ではないが、いくつかの共通する視点をとりだすことはできるだろう。

1節で見たように、カルチュラル・スタディズは私たちのつくりだしている日常的な文化がどのように構成されるのか、その過程を明らかにすることを課題の一部としていた。そうした問いには、文化への批判的な視点が含まれている。カルチュラル・スタディズが「批判的立場」と称されるゆえんである。しかし、どのような方法で文化を分析することが「批判的」たりえるのだろうか？ メディアのコトバ・その形式について、受け手／送り手の分析枠組、言説編成権力空間としての＜制度＞、歴史的視点・テクノロジーの問題の順に、カルチュラル・スタディズの方法について見ていくことにしよう。

2.1 メディアのコトバ・その形式について

カルチュラル・スタディズの方法とは、メディアをコトバ（言説、形式）として分析することを基本とする。ここでは、カルチュラル・スタディズの方法に用具としての概念を提供しているマルキシズム、記号論、フェミニズ

ムについてその用語を概略して見ておきたい。その概念とは、「テキストとしてのイデオロギー」「神話」「形式」などである。

マルキシズムはリベラリズムと並んでメディア研究の二つの伝統的な流れを形成している。そのイデオロギー理論は多様に展開しているが、F・イングリシによれば、メディア研究の用具としてのイデオロギー概念とは「テキストとして、語られた行動（発話行為）として取り扱うべき」ものである（イングリシ [1992: 117]）。イデオロギー（あるいはグラムシのヘゲモニー概念を用いる論者もいる）がいかに私たちの常識に侵入し浸透しているかを理解するために「メディアが語ったこと」をできるだけ緻密に記述する、という方法が用いられる。この記述は、メディアの意味作用、権力作用、生産の各レベルについて総合的になされなければならない。このときイデオロギーのかたちとして＜発見される＞のが、テキストの「形式」なのである。

ロラン・バルトもまた、「神話」という概念を用いて文化の形式を描き出そうとした。バルトは、「記号（＝言語）のさまざまな形式は人々のなかに深く浸透し大きな力を持っているので、それらは自我と社会の本質を形成する」ものと考えていた。彼は記号を記号表現（SA）と記号内容（SE）とに区分し、「意味」と「形式」とに置き換えて神話の分析をおこなった。多層的なレベルにおけるSAのさまざまな「形式」が抽出され、その神話作用が分析された（バルト [1983]）。

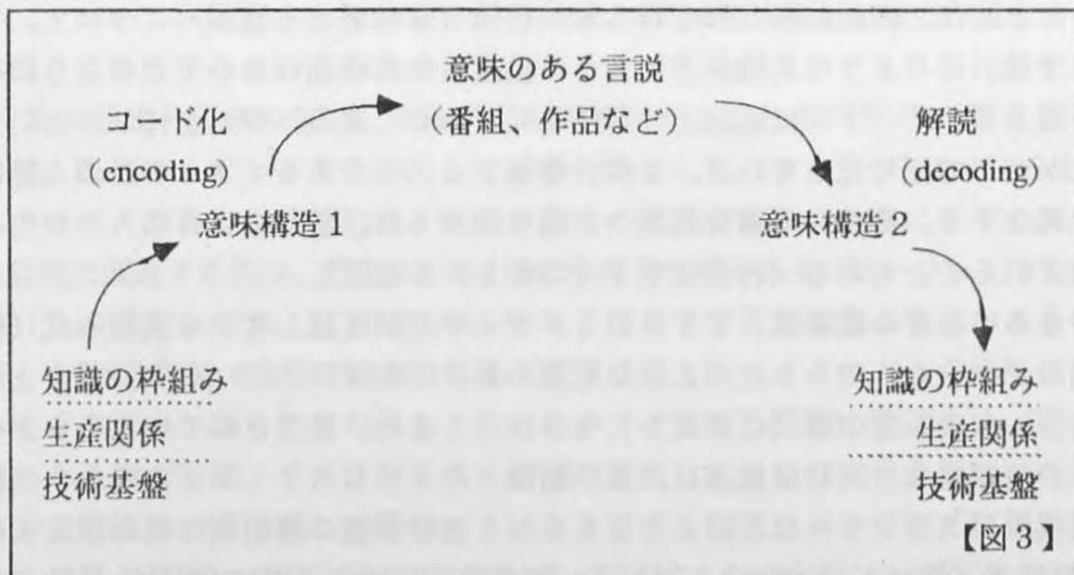
フェミニズムのメディア分析の方法は多様であるが、マルキシズム、記号論、文芸批評の流れにあるフェミニズムの手法においては、芸術表現の「形式」に着目する。それらの研究は、さまざまな領域の表現形式にあらわれた＜性＞をめぐるイデオロギーや神話を批判的に取り上げ再考する。フェミニズムの手法は、＜性別化した主体＞や＜性別化した文化＞といった概念を焦点づけ、その非対象性をするどく批判の対象とするものである。たとえば、＜女＞作者という位置と作品を構成する表現形式とイデオロギーの相互関係を取り扱った研究（R・パーカー、G・ポロック [1981=1992]、石田佐恵子 [1992c]）など。

テキストの「形式」に着目しそれを微細に記述することによってイデオロギーの作用を明らかにしようとする試みは、ある面では有効なものであった。しかしながら、こうした方法は単純な形式主義と静的な記号の解読にとどまる傾向があるのは否めない。このような批判点を克服するようなさまざまな論議が続けられている。

P・ブルデューは、文化理論における構造主義者の伝統と機能主義者の伝統とを統合して、あらたな領域を示した。構造主義者の伝統では、文化をコミュニケーションの道具とみなし、現に表現されている記号の意味と世界の意味を一致させようとする傾向があるため（合意の理論）、「構造化された」構造に関心が偏重する。合意の理論においては、コミュニケーションの送り手と受け手間の意味作用は暗黙のうちに一致するものとの前提がおかれている。一方、機能主義者の伝統においては、文化を既成の秩序を正統化するための道具とみなすため、イデオロギー的機能に関心が偏重する。ブルデューは両者を統合し、構造を再生産する権力をさずける、認識しえない構造としての象徴形式こそ明らかにしなければならないとした（ブルデュー [1971=1986]）。

2. 2 分析枠組

このような「形式」をめぐる論点は、メディア論のなかでは言説（テキスト）分析に焦点づけられ展開されている。S・ホールは、テキストについての方法を「送り手／受け手」というメディア研究の伝統的な図式に当てはめて分析枠組をつくりだした（Hall [1980]）。この図式はカルチュラル・スタディズの分析枠組としてもっとも基本的なものであり、意味のある言説（TV番組、映画、小説、などのテキスト）を中心に、送り手側と受け手側の両方で構成要素に分解したものから成っている（図3）。



送り手側における意味生成（表現）の過程は、コード化(encoding)と呼ば

れる。一方、受け手側における意味生成の過程は、解読(decoding)と呼ばれる。それぞれの過程には、意味構造1と意味構造2が対応しておかれている。意味構造とは「文法」であり、私たちが共有する言語が意味を生成するための規則の体系である。日常的な意識、〈常識〉的知識においては、コミュニケーションにおける合意の理論が前提とされがちである。すなわち、意味構造1と意味構造2の一致が暗黙のうちに前提とされている。しかし、カルチュラル・スタディーズの分析では両者は注意深く区別される。いってみればこの図式では「ディスコミュニケーション」が前提とされている。この観点からは、合意の理論=コミュニケーションの送り手と受け手間の前提としての意味作用の一致はありえない。

こうした過程をさらに分析的に考察しようとする場合、その送り手や受け手のそれぞれの知識の枠組み、生産関係、技術基盤といった問題に視点を移すことができる。また、図式中には、現代のメディア理論にとって重要な意味を持つテクノロジーの問題⁷⁾も含まれている(2.4を参照)。

カルチュラル・スタディーズはメディアによる文化生成=〈現実〉の構成について、メディアのコトバ(言説、形式)を分析することを通して明らかにしようとする。ホールの枠組から、TV番組の分析例を考えてみよう。TV番組というメディアによって「語られる」コトバにはさまざまなレベルのものが考えられる。以下はそのほんの一例である(フィスク&ハートレー [1978=1991]、Brown, M.E., Ed. [1990]などを参照)。

たとえば、画面に映しだされるもの自体(意味のある言説)について。ここでは、どのような人物がどのように設定された場面においてどのように何を語るのか? TVは画面上の身体を〈女〉や〈老人〉や〈金持ち〉といったかたちで記号化している。また、登場する人物をある〈タイプ〉の人物に単純化する。そこに〈固有名詞〉が貼り付けられ、数々の〈有名人〉が生み出されることもある(石田佐恵子 [1992b]を参照)。

さらに、その番組は、TVというメディアが制度化している表現形式(番組のジャンル)のうちどのような形態のものなのか? ドラマ(〈フィクション〉)なのか生中継(〈事実〉)なのか? また、放送されているチャンネルや時間帯は? CM放送による中断はどのようなタイミングなのか? 番組提供のスポンサーはどのようなものか? 送り手側の番組制作者の想定する「視聴者」像はどのようなものか? 制作を規定する予算や制約などは? 過去の番組制作から継承されるものとはなにか? 受け手側の視聴者はどの

ような場所で、どのような態度で、どのようにTVに向かっているのか？
リアルタイムか録画か？、などなど。

このような、TVというメディアによって「語られる」コトバの文法は私たちにとって馴染み深いものであり、習慣的にコード化／解読をくりかえすことを通じて意味構造の基盤となる知識の（認知の）枠組が形成される。送り手側／受け手側それぞれについて知識の枠組が記述されなければならない。同様に、生産関係や技術基盤についても記述されなければならない。

イングリシによれば、カルチュラル・スタディズにおけるイデオロギー分析のレベルはメディアの①意味作用、②権力、③生産、の三重構造について焦点づけられ、考察されるべきであるという（イングリシ [1990=1992: 108-111]）。ホールの枠組の意味構造、知識の（認知の）枠組、生産関係、技術基盤のすべてはそれぞれ言説の意味作用、その〈場〉に作用する権力、言説の生産の三つの構造に関わりをもつ。

2. 3 言説編成権力空間としての〈制度〉（〈場〉と〈主体〉）

M・フーコーもまた、文化を言説として分析する領野を開き、カルチュラル・スタディズの分析方法に影響を与えた（イングリシ [1990=1992]、伊藤・藤田 [1990] 参照）。記号論的な分析方法がメディアの意味作用に焦点をあてたものであるのに対して、フーコーは言説編成の権力に焦点をあてた研究を展開した。フーコーの視野がメディア研究にもたらしたインパクトとは、メディアが「語る」文化を言説の形成、その編成の規則、権力作用といった視点で分析するというものである。そういった分析はメディアが行使する「言説の形成・編成の規則」の権力作用を摘出することを目的の一部としており、既存のメディア文化に対して「批判的な」視点をもちうるものである。

フーコーが考えた言説形成・編成の権力の構成要素のうち特にメディア文化研究に関連するのは、言表の主体とその制度的な場である（フーコー [1970=1981]）。言表の主体（以下〈主体〉）は「誰がその言表を語る資格があるのか」に関連する。言表の制度的な場（以下〈場〉）は「どのような場所においてその言表が語られるのがふさわしいか」といった問題に関連する。言表をめぐる権力空間、その言説形成・編成の規則は、ある特権性をもった〈主体〉と〈場〉とを生成し、維持する。たとえば、現代においては「狂気」について語る資格があると見なされている〈主体〉（＝医者）と〈場〉（＝病院）とが産出されている、といったように。

このような視点からすると現代文化にとってメディアとは、ある特権性をもった＜主体＞と＜場＞とを生成し、維持するものである。たとえば、TVや新聞といった報道メディアは「事実」「本当にあった出来事」について語る特権的な＜主体＞と＜場＞とを産出する。同様に、今日のメディアは「美しさ」「健康」「病い」「死」といったきわめて人間的な領域に関連することに対して語り、それらにみあった文化をつくりあげる。

フーコーの用いた方法は、語られたことを収集し言表の表面を見定めることから始めて、言説をそれ自体のアンスタンス（審級）の働きから徹底的に追求するというものである。こうした視点は、ブルデューの問題とした「構造を再生産する権力をさずける、認識しえない構造としての象徴形式」を探究することに通じるように思われる。ここでは、メディアとその＜制度＞を、ある社会において統制され、選択され、組織化された言説生産の＜場＞、言説編成権力空間としての＜制度＞としてとらえておくことにしよう。

2.4 歴史的視点・テクノロジーの問題

ホールの枠組のうち、技術基盤は、意味構造、知識の枠組、生産関係のすべての基礎的位置づけにおかれている。技術基盤は意味構造や知識の枠組と同様、メディアの意味作用、その＜場＞に作用する権力、言説の生産の三つの構造に関わりをもつ。従来のメディア研究においては、テクノロジーの問題は（物理的な）メディアの機能の問題、メディアの発達の問題といったように独立の分野として取り扱われる傾向があった。そのような視点からは、技術基盤・テクノロジーが意味生成の問題に密接にかかわりあうという点は欠落しがちであった。

W-J・オングは、コトバの文化の歴史をテクノロジーの観点から三段階に整理した（オング [1982=1991]）。オングの歴史的な視点をもった研究は、アメリカ流のカルチュラル・スタディーズにおいて「特別の地位」を占めるものとして高く評価されている（Gronbeck, et al. Ed. [1991]）。

オングの文化史は、人間のコトバの歴史を「（一次的な）声の文化」「文字の文化（印刷）」「電子的メディアの文化（二次的な声の文化）」の三段階に区分して論ずるものである。その作業を通じてオングは、「一次的な声の文化（まったく書くことを知らない文化）」と「文字の文化（書くという技術に深く影響されている文化）」とのあいだには、知識のありかたやコトバの表現において基本的な違いがあることを明らかにした。そこで＜発見された

＞ことは、現在の多くの社会において全く「自然な」「人間的な」性質であると見なされているような意識の構造や文化は、実は「書く」技術によってもたらされたものであるということである。こうして、「声の文化」と「文字の文化」の性質の違いが対比的に明らかにされるのであるが、このような＜発見＞は現在の電子的なメディア（電話、ラジオ、TVなど）による「二次的な声の文化」を研究することによってもたらされたものだという。

このように、カルチュラル・スタディズの第四の方法は、歴史的視点で記述をおこなうというものである。オングほど壮大な歴史を描くのは容易ではないにせよ、あるテクノロジー（あるいは、形式、＜制度＞）に焦点をあわせて、その時間的な変化・変容を記述するという方法は、カルチュラル・スタディズの課題に対してきわめて有効であるように思われる。

3. 実践的分析へ向けて

ここまでの作業において、カルチュラル・スタディズの領域と方法について概略的にではあるが明らかにすることを試みてきた。最後に、現代の文化現象を分析するという実践の意味について、若干の考察をしておくことにしよう。

カルチュラル・スタディズは、私たちにとって身近な現代の文化とはいかなるものであり、そればどのように構成されるものであるのか、という問いかけに答えることを課題としていた。それは同時に、自らが作りあげている文化への批判性を内包するものであった。私たちの生活を取りまくさまざまなメディアと意味のある言説について、それを構造化する権力への分析をおこなうことはそのひとつの例である。そのような意味において、カルチュラル・スタディズの分析は「実践的分析」と呼ばれている。

実践的分析の含意のひとつは、身近な文化を対象として研究を展開することのもたらす「脱制度化」の効果という点にある。カルチュラル・スタディズの方法は、メディアをコトバとして扱い、その形式性に着目する。カルチュラル・スタディズの対象（TV番組やポピュラー音楽、映画など）は、私たちにとってあまりにも身近であるため、その文化は直接的に私たちの意味構造に訴えかける。たとえば、自分の居間で習慣的にTVをながめている場合と研究対象としてTVを＜読む＞場合とでは、何がどのように違うのだろうか？ その大きな差異のひとつは、TV番組という意味のある言説の意味構造

に関係する制度化された〈場〉の問題である。前者の経験は、きわめて日常的な脈絡で（すなわちそれ自体、制度化された〈場〉において）TV番組を「TV番組として」受け取り享受するという経験である。それに対して後者の経験は、TV番組を意味のある言説として成立させている制度化された〈場〉から一時的に引き剥がし、それを再考しようとするものである。すなわち、「研究対象として（おそらく、ビデオに録画された）あるTV番組を見る」という経験は、日常的にそれを見ているのとは違った場所で、違った時間に、違った仕方ですべてを「見る」ということにほかならない。そのような経験は、日常的にそれらの言説が意味していることがらとは違った意味をもたらすものとなりうるのである⁽⁸⁾。

また一方、カルチュラル・スタディーズの分析が「実践的分析」と呼ばれるのは、文化創造への直接的な批判性を持つという含意もある。そのような「批判性」に対する論議は、伝統的なメディア研究の脈絡にしたがって、メディアの受け手の「自由」という問題設定で論じられている。

2. 2において取り上げた分析枠組に付随する議論として、ホールらは、意味のある言説を解釈する受け手の文法を三つのタイプに分けている。TV番組を例にとると、TVを見ている視聴者（受け手）たちは、①優先的意味の再生産をおこなうもの(dominant coding)、②優先的な意味を受入れつつも個人的には保留の解釈をおこなうもの(negotiated coding)、③優先的意味とは全く対立する解釈をおこなうもの(oppositional coding)、という主要な三つの文法によってTVを解釈しているという（イングリズ [1990=1992]、阿部 [1991] 参照）。この脈絡から言えば、受け手の「自由」とは③の優先的意味とは全く対立する解釈をおこなうという文法において期待される。そして、そのような文法の獲得（と教育）こそ文化への「批判」となりうる、という議論もある。

ここでは、表現者の「自由」・送り手側の創造についても、ホールのいう三つのタイプの文法がありうるのではないかということを指摘しておきたい。新しい表現の創造は、従来の〈制度化した〉表現の枠を超えたところに生み出される。しかしながら、コミュニケーションによる文化の生成である限り、全く従来のコードから外れたものではそもそも「意味」を生成するものではありえない。上記の①～③の文法は、送り手—受け手間の相互作用の結果（おそらく、ポピュラー・カルチャーの分野では商品の論理といったものもきわめて重要な要因となるであろうが）、時間的な変遷をたどり変容してい

くものと考えられる。

結び 要約と展望

1 節においては、カルチュラル・スタディズの領域として、その立場を特徴づける「文化」観、メディア及びコミュニケーション観、＜構成される現実＞観についてまとめた。カルチュラル・スタディズは、私たちにとって身近な文化（＝ポピュラー・カルチャー）を対象領域とする。ただし、その場合の「ポピュラー・カルチャー」とは、従来のハイ・カルチャーに対立する「民衆の文化」、量や商業主義によって規定される「大衆文化」とは異なるものである。また、カルチュラル・スタディズのメディア観は、日常生活全般に及ぶような広範なものである。カルチュラル・スタディズは、「私たちの日常生活＝＜現実＞は、（メディアによって）構成されるものである」との認識に立つ。そのうえで、その＜現実＞がどのように構成されるのか明らかにすることを課題とする。

2 節では、1 節において明らかにされたカルチュラル・スタディズの領域と課題に対する分析方法を整理することを試みた。まず、対象となるメディアをコトバ（言説、形式）として取り扱うことが方法の基礎となっている。そのうえで、合意の理論を前提としない分析枠組が示された。その分析枠組から記述されるのは、メディアの意味作用、権力、生産にかかわる装置としての＜制度＞である。また、メディアのテクノロジーの視点をも含んだ、歴史的な記述方法が示された。

3 節ではカルチュラル・スタディズの実践的分析の意味について、若干の考察がなされた。実践的分析の意味として、制度化された＜場＞からの脱制度化の効果、文化の解釈と創造に関する変容の可能性、の二点が示された。

最後に、本論の作業をふまえ、今後のメディア文化分析へ向けていくつかの展望を示しておこう。

メディア文化の分析は対象とする領域が雑多なものであるだけに、ともすれば散漫な視点や現象記述に流れたものになりがちである。情報化社会と呼ばれる現代社会においては、さまざまな文化の分野、嗜好の分野のすみずみにまでメディアが発達しており、それぞれの分野のスペシャリストが多数存在する。そのような状況のなかで、あえて「研究」というかたちでメディア

文化を対象とするためには、現象を詳しく報告するのみの、いわば情報落差を利用した文化研究とは異なる視点をもつことが必要である。すなわち、メディア文化一般について適用可能な、広い射程をもった理論が必要なのである。仮にそうした理論がめざされるならば、カルチュラル・スタディーズの研究領域は、全く新たな広大な領野を開く可能性があるように思われる。

今後の課題としては、意味生成、権力作用、文化生産の制度化された生産装置を総体を〈リアル〉のテクノロジー（石田佐恵子 [1992b]）としてとらえた視点・方法を発展させることを目指したい。〈リアル〉のテクノロジーの構成要素はさまざまなものが考えられるが、特にそのなかでも、感情の〈制度〉の研究は重要な課題と思われる。感情的経験はメディアによって構成される〈現実〉においてもっとも〈リアル〉な経験をかたちづくるものである。また、人々の身体領域、ハビトゥス（ブルデュー）、リテラシー（オング）、ビデオシー（デンジン）などの各視点に焦点づけられた研究を展開することを通じて、〈リアル〉のテクノロジーのさまざまなありようを明らかにしていきたい。

ポピュラー・カルチャーのコトバは、通文化的な言語としての性質を持っている。私たちは、外国でたとえその国の言語が分からなくても、TVの天気予報を理解することができる。好むと好まざるとにかかわらず、ポピュラー・カルチャーの共有が世界的な規模で生じている。特に情報化した先進諸国においてこの傾向は顕著である。情報化社会やメディア社会のついでに人文社会科学的な研究は、このような意味において通文化的な視点でなされなければならない。

従来「通俗的なもの」「研究の対象に値しないもの」と見なされてきたポピュラー・カルチャーを研究対象として見定めることは、それ自体「文化の正統化（ブルデュー）の営み」であるかもしれない。しかし重要なのは、対象に意味づけされた価値ではなく、それをとらえる視点なのである。

（いしたさえこ・文化社会学）

(1)ただし、一部の戦前の新聞学、ジャーナリズム論も評価を受けている。

(2)1964年にバーミンガム大学現代文化研究所が設立された。活動が明確なものとなるのは、S・ホールが研究所長に就任して以降のことだとされている（McCall & Becker [1990]）。ただし、S・ホールは現在ではイギリスの放送大学に移動している（Grossberg [Ed.] [1992]）。

(3)本論において'Culutural Studies'を「文化研究」と訳さずに「カルチュラル・スタディーズ」とカタカナ表記するのは、これらの文献にならったものである。カタカナ表記の意図は、従来から続けられている文化を対象

とした多くの研究との差異を強調するためである。また、'Study of Culture'の訳語と区別するという意味合いもある。

また、ここでは「カルチュラル・スタディズ」をポピュラー文化研究の領域に限定して論を進めているが、本来「カルチュラル・スタディズ」はその領域にとどまらず、文芸批評理論、テキスト分析一般を対象とする広い研究であることをつけ加えておきたい。

(4)ここでは、「メディア」という用語を「体験を知識に変換するもの」「日常生活の出来事に意味を付与する記号を提供するもの」(イングリシス [1990=1992: 7]) という意味において使うことにする。「メディア」という用語の定義は使われる脈絡、分析の焦点によって異なることが少なくない。たとえば、私自身も別な文脈においては「未知の受け手の集団、いわば抽象的な観客をつくりだすコミュニケーションのシステムである」としている(石田佐恵子 [1992b])。こうしたいくつかの「メディア」の定義は、たがいに相補的なものである。

(5)Real [1989] からの引用図に一部手を加えたもの。

(6)Real [1989] からの引用図に一部手を加えたもの。

(7)石田佐恵子 [1989] では、コミュニケーション論の脈絡からこの図式に類似した図式を考えているが、コミュニケーション一般を念頭に置いているためテクノロジーや制作主体の生産関係については考察が及ばず、＜制度化した＞状況として一括されている。ホールの図式は、＜制度化した＞状況をさらに知識の枠組み／生産関係／技術基盤の三つに分けて考察する図式であるといえよう。

(8)こうした方法は、カルチュラル・スタディズの対象(TV番組やポピュラー音楽、映画など)を録音機器やVTR機器によって収集し、蓄積し、保存することが可能になって始めて一般に応用可能なかたちで成立した。それは、電子的なメディアによるコミュニケーションに代表されるような視覚的・音楽的な文化のテキストを「書かれた」テキスト(書物)と同じように扱えるようになった事態を意味している。

【参考・引用文献】

阿部 潔 [1991] : 「英国のカルチュラル・スタディズにおける『批判性』再考—ポスト・モダンの批判的コミュニケーション理論か?」

『新聞学評論』40

バルト・R [1957=1983] : 篠沢秀夫訳『神話作用』現代思潮社

Bellington, R., et al. [1991] : *Culture and Society*, Macmillan.

ブルデュー・P [1971=1986] : 福井憲彦・山本哲士訳「考えられるものと考えられないもの」『actes』No.1

Brown, M.E. Ed. [1990] : *Television and Women's Culture*, Sage.

Brown, R.H. [1987=1989] : *Society As Text*, The University of Chicago. = 安江孝司・小林修一訳『テキストとしての社会』紀伊国屋書店

Denzin, N.K. [1989=1992] : *Interpretive Interactionism*, Sage. = 関西現象学的社会学研究会訳『エピファニーの社会学』マグローヒル

—— [1991] : *Images of Postmodern Society*, Sage.

—— [1991] : *Symbolic Interactionism and Cultural Studies*, Blackwell.

- Denning, M. [1991] : "The End of Mass Culture", in *Modernity and Mass Culture*, Indiana University Press.
- フィスク・J & ハートレー・J [1978=1991] : 池村六郎訳『テレビを<読む>』未来社
- フーコー・M [1970=1981] : 中村雄二郎訳『言語表現の秩序』河出書房新社
- 藤田真文 [1986] : 「カルチュラル・スタディーズ派におけるメディア論とネオ・マルクス主義的社会構成体論との関連性」『新聞学評論』35
- [1998] : 「『読み手』の発見 — 批判学派における理論展開」『新聞学評論』37
- Gronbeck, B.E., et al. Ed. [1991] : *Media, Consciousness, and Culture*, Sage.
- Grossberg, L., et al. Ed. [1992] : *Cultural Studies*, Routledge.
- Hall, S. [1980] : "Encoding/decoding", in *Culture, Media, Language*, Hutchinson & Co. Ltd.
- Hall, S., et al. Ed. [1980] : *Culture, Media, Language*, Hutchinson & Co. Ltd.
- Inglis, F. [1990=1992] : *Media Theory*, Basil Blackwell. = 伊藤 誓・磯山甚一訳『メディアの理論』法政大学出版局
- 石田佐恵子 [1989] : 「分析用具としての『制度』概念とコミュニケーション」大阪市立大学文学部紀要『人文研究』41-1
- [1992 a] : 「情報誌による<都市>空間イメージ」『都市問題研究』44-6
- [1992 b] : 「<有名性>はどうつくられるのか」『ポップ・コミュニケーション全書』PARCO出版
- [1992 c] : 「<少女マンガ>の文体とその方言性」『コミックメディア』NTT出版
- 伊藤守・藤田真文 [1990] : 「構造主義以降のコミュニケーション論」『新聞学評論』39
- 児島和人 [1988] : 「能動的受け手像の探究—カルチュラル・スタディーズにおける経験的受け手研究の特質」『新聞学評論』37
- McCall, M.M. and Becker, H.S. [1990] : "Introduction", in *Symbolic Interaction and Cultural Studies*, The University of Chicago Press.
- オング・W-J [1982=1991] : 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化

と文字の文化』藤原書店

Paget, M.A. [1990] : "Unlearning to not speak", in *Human Studies* 13

パーカー・R & ポロック・G [1981=1992] : 萩原弘子訳『女・アート・イデオロギー』新水社

ポスター・M [1990=1991] : 室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店

Real, M.R. [1989] : *Super Media*, Sage.

佐藤 毅 [1987] : 「戦後日本のマスコミ論の展開」『社会学評論』38-2

清水知久 [1992] : 『アメリカの大衆文化』明石書店

Straw, W. [1988=1990] : "Music video in its contexts : Popular music and post-modernism in the 1980s", in *Popular Music* 7-3. = 「音楽ビデオ — 1980年代のポピュラー音楽とポストモダニズム」『ポピュラー音楽の研究』音楽之友社

竹内郁郎 [1987] : 「概説 日本の社会学 マス・コミュニケーション」『マス・コミュニケーション』東京大学出版局